

大学生の性に関する調査（第一報）
—青森県の3大学における大学生の性教育・性行動の実態—
A Survey on Sex of College student (The first report)
-A Sexual Health Study of College student at the Three Universities in Aomori Prefecture-

高橋雪子 坂本保子 藤邊祐子

要旨

本研究は、青森県の大学生の性教育・性行動の実態を把握し、今後の大学生の性教育のあり方を検討することを目的に質問紙調査を行った。その結果、3大学から協力が得られ、有効回答数132名を分析しており、約8割の者が大学における性教育の必要性を認めていた。これは高等学校までの性教育では不十分であることを学生は認識しており、手段としては多くが「講義」を求めていることから、大学におけるカリキュラムの中で「人間理解」に関連する幅広い科目の中で、「人間の性」について取り上げ教育実践する必要性が示唆された。

キーワード：大学生 性教育 性行動 青森県

I はじめに

現在わが国では、学習指導要領に基づき小学校から高等学校まで性教育が行われている。しかし、文部科学省において性教育を行う場合は、「人間関係についての理解やコミュニケーション能力を前提とするものであり、その理解のために性教育が行われるべきものであり具体的な避妊方法の指導に走るべきではない。」としている¹⁾。

6年おきの全国調査である第8回青少年の性行動調査によると、大学生の性交経験は減少傾向になっているが高校生の性交経験と比較するとかなり高い²⁾。つまり、高校卒業後に性行動は活発になることを意味するが、思春期から青年期に移行することから正常な成長過程ともいえる。しかし、SNSやインターネットを通じ、性情報にさらされる中、正しい情報を見極め行動

に移すには困難が生じると予測できる。今回、青森県の3つの大学から協力を得られ、大学生3・4年生を対象に性教育・性行動についての実態調査を行った。その結果、約8割の学生が大学における性教育を希望していた。著者が行った2012年の調査では約5割の学生が性教育を必要としており、学生の性教育に関するニーズは高くなっていた³⁾。

2009年にユネスコおよび国連合同エイズ計画、国連人口基金、ユニセフ、世界保健機関との共同で「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」の初版が発表され、「包括的性教育」や「セクシュアリティ教育」という言葉や概念が広まった。2018年には国連女性機関も加わり改訂版が発表され、初版では6つのキーコンセプトが8つに変更され「ジェンダーの理解」「暴力と安全確保」が新たな項目として加わり、さらに「セク

シュアリティ」という用語が新たに使われている⁴⁾。我が国の性教育は国際的潮流に大きく遅れをとっている。

今回の研究では、制限のある性教育を高等学校まで受けた大学生たちの性教育・性行動の実態を把握することを目的に実態調査を行い、大学生が性的に自立し性の健康を享受するため教育的に何が必要かの示唆を得ることができたので報告する。

II 対象および方法

1. 研究デザイン

質問紙調査による量的記述研究デザイン

2. 研究対象者および調査方法

青森県内における大学生の実態を明らかにするために大学生活を半分終えた 3・4 年生とした。青森県内にある 11 校の大学から任意に 10 校選出しアンケート調査を依頼する文書を送付した。返信があったのが 4 校で協力を承諾した大学は 3 校であった。調査は、著者らが作成した質問紙を大学担当者に郵送にて届け学生への配布を依頼し、学生が各自回答後郵送する方法で行った。調査期間は、2018 年 12 月から 2019 年 5 月である。

3. 調査内容と分析方法

調査内容は、質問紙による自記式質問紙を用いた。調査項目は、基本属性として年齢、性別、学部、居住形態であり、性教育・性行動に関する内容は表 1 に示したとおりである。すべてのデータは『SPSS24』を使用し基礎的集計を行った。項目によっては、男女間、性交経験の有無で差が認められるかを統計処理し 5%未満を有意水準とした。

4. 倫理的手続き

対象者には調査票に依頼文を添付し、調査の趣旨、匿名性、参加の自由、研究以外には利用しない旨を明記し、回答の提出でもって同意したと判断した。本研究は、八戸学院大学・八戸学院短期大学部研究倫理審査委員会の審査をうけ承認を得て実施した【18-10】。開示すべき利益相反はない。

III 結果

1. 回収状況および対象者の属性

質問紙の郵送数は 605 部で、回収 135 部、回収率は 22.3%であり、有効回答率は 132 部であった。対象者の属性については表 2 に示した。年齢は、19 歳が 10.5%、20～21 歳が 70.7%、22～24 歳が 15.8%であり、性別では男性 18.8%、女性 80.5%であった。所属している学部は看護・保健系が 80.0%、経済・経営系が 12.0%、社会福祉が 5.3%、教育が 0.8%であった。居住形態は一人暮らしが 19.5%、家族と同居が 66.2%、寮が 9.8%、下宿が 2.3%であった。

2. 性教育について

これまでに性教育を受けた者は、99.2%でほとんどが受けていた。性教育を受けた時期は、小学校が 59.2%、中学校 92.3%、高等学校 75.4%、大学 45.4%であった（複数回答）。性教育の内容については、表 3 に示すとおりである。性教育を受けた方がよい最初の年齢については、「12 歳」「13 歳」「10 歳」「11 歳」の順で多かった（表 3）。性教育を通じて得られた知識の程度は、「かなり得られた」「まあまあ得られた」を合わせると 74.5%、性教育の必要性については、「とても必要」「やや必要」を合わせると 98.5%であった。性に関する情報源は、多い順に「雑誌」51.9%、「学校の先生」47%、「友人」「恋人」はそれぞれ 42.9%であった（表 4）。

大学での性教育の必要性については、「とても必要である」「やや必要である」を合わせて85.8%で、性教育を希望する理由としては、「正確な知識を身につけたい」が43.6%、「高校までの性教育では不十分」が17.3%、「男女の心理行動を知りたい」13.5%、「高校卒業後の方が性の悩みが増える」が9.8%の順で多かった。大学の性教育で良いと思う方法は、「講義(授業)」47.4%、「講演」25.6%、「冊子配布」4.5%、「個別相談」3.0%の順であった(表5)。

3. 性行動について

1)性交経験について

性交経験の有無は、「ある」61.4%、「ない」38.6%であり(表6)、これまでの性交パートナーの人数は、「1人」31(37.3%)、「2人」15(18.1%)、「3人」13(15.7%)、「4人」9(10.8%)、「5人」8(9.6%)、「7人」2(2.4%)、「9人・10人・15人」がそれぞれ1(1.2%)であった(表7-1)。初めて性交経験をした年齢は、「17歳」22.9%、「18歳」18.1%、「19歳」「20歳」がそれぞれ14.5%であった(表7-2)。

2)避妊について

避妊の頻度は、「いつもしている」が42.1%、「ほとんどしている」が15.8%、「時々している」が3.0%、「たまにしている」が0.8%、「避妊しない」が0であった(表6)。普段実施している避妊方法は、「男性用コンドーム」「膣外射精」「月経周期の活用」「低用量ピル」の順であった(表8)。避妊をしない理由は、「避妊具の準備が間に合わない」が7.5%、「妊娠をしないと思っている」が6.0%、「相手のことが好き」が4.5%の順で多かった(表6)。

3)その他

①LGBTについて

LGBTについて「知っている」は97.7%、「知らない」は2.3%であった。LGBTの仲

間・友人については、「受け入れられる」は67.2%、「やや受け入れられる」は24.4%、「どちらともいえない」は6.1%、「あまり受け入れられない」は0.8%、「受け入れられない」は1.5%であった(表9)。

②性について困っていること、疑問に思っていること

表10に示したように少数の回答であったが、身体のことや性知識に関すること、考え方や多様性に関することがあげられていた。

IV 考察

1. 性教育について

我が国の学校性教育は、文部科学省が告示する初等教育および中等教育における教育課程にそって行われている。内容は、小学校で二次性徴を、中学校で生殖機能の成熟、受精・妊娠、性衝動、情報への適切な対処と行動の選択、HIV感染/エイズと性感染症を、高校では性感染症の一環として再度HIV感染/エイズと性感染症、思春期の心身の成長(生殖機能)、結婚生活(受精・妊娠・出産、家族計画として避妊を含む)、異性尊重の態度と性情報への適切な対処を教えることになっている(2017・18年に改訂)。妊娠に至る経緯は、取り扱わない(性交)という条件が示されている。今回の調査では、中学校92.3%・高等学校75.4%で性教育を受けていた。大学では45.4%と高値であるが対象者の所属が看護・保健系(82%)であるため、講義を通じて学修していることが考えられる。「性教育を開始した方がよいと思う年齢」は、10~12歳がほとんどであったことから二次性徴が始まる小学高学年からその必要性を感じている。

性教育を通じて得られた知識の程度には約7割が「多く得られた」と答えており、性教育の必要性についてはほとんどが認

めている。性に関する情報源は「雑誌」「学校の先生」「友人・恋人」の順で多かった。

「学校の先生」が多いのは先に述べた対象の所属に起因していると推測される。第 8 回青少年の性行動調査⁵⁾によると大学生の性に関する情報源は、男子は「友人や先輩」「アダルト動画」「インターネットやアプリ、SNS など」の順で多く、女子は「友人や先輩」「インターネットやアプリ、SNS など」「マンガ／コミックス」の順で多い。これらは情報を入手しやすいというメリットがあるが、その正確性には保証がなく間違った知識にもとづいて行動してしまう危険性がある。近年、若者の生活に合わせてネット情報で正しい性の知識を伝える個人・団体が増えていることは吉報であるが、それを見つけ、選び取る力が必要になってくる。

大学での性教育の必要性については約 8 割が認めており、高校までの性教育では不足と考えていることがわかった。その理由として最も多かったのは、「正確な知識を身につけたい」だったことから、多くの情報の中で正しさを保証してくれる内容を求めていることが考えられる。2011 年に著者が実施した調査では、「高校を卒業後も性教育はあったほうがよいか」の問いに「はい」は 41%、「いいえ」は 59%であり、大学での性教育の必要性を認めている者は今回の調査結果の方が多くなっていた。「理由」については、「信頼できる正確な知識を身につけたいから」で、「希望する方法」は「講義の一環として」が最も多く今回の調査と同じ傾向であった。

2. 性行動について

性交経験が「ある」は男女とも約 6 割で、全国調査（男子 47.0%、女子 36.7%）に比べ多かった。性交経験をした相手の数は、「1 人」「2 人」「3 人」の順で多く約 7 割を

占めており全国調査と同じ傾向であった。性交する相手が増えるということは、性感染症に罹患する機会が増えることにもなるため、性感染症予防対策に繋がる知識と行動が必要になってくる（性感染症に関する調査結果は別に報告予定である）。性交開始年齢は、「17 歳」「18 歳」の順で多く全国調査では「18 歳」「19 歳」の順で多い。高校 3 年生から大学生においては性交を経験するものが増えることを念頭においた性教育が必要である。

避妊については、「いつもしている」「ほとんどしている」を合わせると 57.9%で、全国調査 74.4%より低いことが分かる。しかも、その方法は、「男性用コンドーム」「膣外射精」と男性主体の避妊法でいずれもパール指数は、男性用コンドームが 2～15%、膣外射精が 4～19%と類似している方法である。これは全国調査でも同じ結果となっており、2011 年の著者の調査でも同様である。つまり、我が国の若者の避妊の状況には進歩がみられないといえる。妊娠は女性しかしらない、しかし避妊法は男性主体の方法が主流（低用量ピルの内服率は 2019 年で 2.9%である）である⁶⁾ことは、予期しない、望まない妊娠につながってしまうことは明白である。避妊をしない理由については、「避妊具の準備が間に合わない」「妊娠をしないと思っている」「相手のことが好き」の順で多かった。人工妊娠中絶率は、青森県においても全国においても減少傾向であるが、避妊行動が出来る背景には、正確な知識と技術、自分や相手を大事にする気持ち、そして行動に伴う交渉力や責任感が育っていなければならない。それは性を楽しむ中での自立につながり、性暴力や性の搾取など性が抱える影の部分を予防することにつながる。今回の全国調査の結果を土田ら⁷⁾は、興味深い分析をしている。それは、初交年齢が高いほど確実性の高い

避妊を実行しているということであった。初交年齢が低いほど初交時の避妊の実行率が低い（特に15歳以下）。それは避妊の知識が不十分であるだけではなく、特に女子においては合意に基づかない初交であった可能性も少なからずあったと指摘している。また、初交年齢の低い者はその後の避妊も十分に実行できていないことも示された。このことは、性教育を早期に始めることが「性の健康の実現」につながり、これは「性教育を受ける権利」が保障されることが前提となる。

今回、その他として「LGBT」と「性の悩み」について尋ねた。「LGBT」について97%は「知っている」と答えた。セクシュアルマイノリティは、メディアや芸能、文学などでも取り上げられていることで、その認知度は高くなっている。また、看護基礎教育における「母性看護学」では、セクシュアリティの看護について学ぶため、看護・保健系の学生が多かった今回の結果では、おのずと認知度は高くなっていると考えられる。渡辺⁸⁾は、「この5年間ほどで、学校教育における『性の多様性』の位置づけが大きく変化してきている」という。学習指導要領では、「シスジェンダー」かつ「異性愛」が前提となっているが、「性の多様性」や「LGBT」について義務教育（小中学校）の教科書が検定に合格し使われ出している（扱いは、コラムや巻末資料であるが大きな一歩である）。

LGBTの仲間・友人については、「受け入れられる」は65.9%であった。これは男女において有意な結果が得られ、調査済み残渣の結果、女性の方がLGBTを仲間・友人として受け入れられていることがわかった。「性の多様性」や「LGBT」をめぐる教育は、2015年に文部科学省がこのことに関する通知を出してから急速な広まりを見せている。これは、「人権教育等の推進」が

通知の大きな意義であり各教育委員会によって様々な研修が行われており「LGBT」への教育的関心や、これまでのジェンダー／セクシュアリティの学び、性教育全体を「生活(指導)」の視点をもって作り直すことにつながっていくことが求められると述べている。これは「性の多様性」について教育実践していくには、「講義」だけではなく「生活者」として学生の生き方へ直接働きかけていく取り組みが求められている。大学においては、男女共用のトイレ、ロッカー室、実習を伴う場合はユニフォームの自由性、学生相談室の設置など、「多様性ある学生の生活」への配慮が必要になってくる⁹⁾。

性に関する悩みは件数が少なく分析するには困難がある。全国調査でも回答者は一割前後でかなり少ない。選択式の質問への回答とは違い、内面を自分の言葉で表現することを求めるには限界があると考えられる。

V 結語

青森県3大学の大学生の多くは、高等学校までの性教育では不十分感じており、「講義」や「講演」を通じて正しい知識を得たいと考えていることがわかった。大学における「人間理解」や「健康」などに関する講義では、「人間発達」「セクシュアリティ」「人権」「倫理」などについて学ぶ機会がある。これらを通じて「人（性）の多様性」を学び、性に関する正しい知識に触れ、他者を理解し自分はどんな行動をとるべきかを考える機会は性教育につながる。よって、講義を担当する教員は学生の性教育のレディネスを認識し、教授内容を考案していかなければならない。また、学生相談室や保健室においては学生に必要な知識を提供できる体制および学外の専門家との連携体制を整えていく必要があると

考える。

文献

- 1) 文部科学省平成 17 年 7 月 27 日初等中等教育分科会
- 2) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05091401.htm
- 2) 「若者の性」白書―第 8 回青少年の性行動調査報告―. 日本性教育協会／編 (2019). 小学館.227.
- 3) 仁木雪子他：過去に受けた学校性教育の内容と継続のニーズ (第 3 報) (2012). 八戸短期大学研究紀要. 第 34 巻.134-135.
- 4) 改訂版国際セクシュアリティ教育ガイドダンス(2020).明石書店
- 5)前掲書 2) 242.
- 6) United Nations : Contraceptive Use by Method 2019
- 7)土田陽子・俣野美咲：青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性. 「若者の性」白書.日本性教育協会／編 (2019). 138-139
- 8)渡辺大輔：なぜ「生活」から「性の多様性」を学ぶのか. 季刊セクシュアリティ (2020). 「生活から『性の多様性』を学ぶ. No98. エイデル研究所.7.
- 9)前掲書 8) 13

執筆者紹介 (所属)

高橋 雪子	八戸学院大学健康医療学部看護学科	教授
坂本 保子	八戸学院大学健康医療学部看護学科	准教授
藤邊 祐子	八戸学院大学健康医療学部看護学科	講師

高橋雪子・坂本保子・藤邊祐子：大学生の性に関する調査（第一報）
 ー青森県の3大学における大学生の性教育・性行動の実態ー

表1 調査内容

項目
1. 性教育
・これまでの性教育の有無、時期、内容、得られた知識の程度、必要性、性に関する情報源
・大学での性教育の必要性、希望する理由・方法
2. 性行動
・性交経験の有無、初交年齢、性交相手の人数
・避妊方法、避妊頻度、避妊をしない理由、
3. その他
・LGBTの認知度、考え
・性について困っていること、疑問

表2 対象者の基本的属性

		n = 132					
		全体		男		女	
項目	カテゴリ	n	%	n	%	n	%
年齢	19歳	14	10.5%	9	36%	5	4.7%
	20歳から21歳	94	70.7%	10	40%	84	78.5%
	22歳から24歳	21	15.8%	4	16%	16	15.0%
	25歳から29歳	2	1.5%	0	0%	2	1.9%
	その他	2	1.5%	2	8%	0	0.0%
性別	男性	25	18.8%				
	女性	107	80.5%				
学部	看護・保健	94	70.7%	6	24.0%	87	81.3%
	社会福祉	7	5.3%	2	8.0%	5	4.7%
	教育	1	0.8%	0	0.0%	1	0.9%
	経済・経営	16	12.0%	15	60.0%	1	0.9%
	健康医療	15	11.3%	2	8.0%	13	12.1%
学生居住形	一人暮らし	26	19.5%	3	12.0%	23	21.5%
	家族と同居	88	66.2%	10	40.0%	77	72.0%
	同居友人と	1	0.8%	0	0.0%	1	0.9%
	その他	2	1.5%	1	4.0%	1	0.9%
	寮	13	9.8%	11	44.0%	2	1.9%
	下宿	3	2.3%	0	0.0%	3	2.8%

表 3 性教育を受けた方がよい最初の年齢

年齢	n	%	年齢	n	%	年齢	n	%
6 歳	1	0.7	10 歳	27	20.0	14 歳	11	8.1
7 歳	2	1.5	11 歳	13	9.6	15 歳	10	7.4
8 歳	2	1.5	12 歳	30	22.2	16 歳	6	4.4
9 歳	3	2.2	13 歳	28	20.7	無回答	2	1.5

表 4 性教育と性経験との比較

n = 132													
		全体		男		女		性交経験有		性交経験無			
項目	カテゴリ	n	%	n	%	n	%	有意率	n	%	n	%	
II. Q1 これまでの性教育の有無	有り	131	99.2%	25	100.0%	106	99.1%		81	98.8%	51	100.0%	
	無し	1	0.8%	0	0.0%	1	0.9%	n. s	1	1.2%	0	0.0%	
性教育を受けた時期 (複数回答)	小学校入学前	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%						
	小学校	77	59.2%	8	32.0%	69	65.7%		48	60.0%	29	56.9%	
	中学校	120	92.3%	24	96.0%	96	91.4% **		74	92.5%	47	92.2%	
	高校	98	75.4%	16	64.0%	82	78.1%		60	75.0%	39	76.5%	
	大学	59	45.4%	9	36.0%	50	47.6%		38	47.5%	22	43.1%	
性教育の内容 (複数回答)	二次性徴 (発毛・声変わり・乳房の発育など)	114	87.7%	21	84.0%	93	88.6%		74	92.5%	41	80.4%	
	初経 (月経)	125	96.2%	20	80.0%	105	100.0% ***		77	96.3%	0.0	49	96.1%
	性器のつくりと働き	99	76.2%	20	80.0%	79	75.2%		63	78.8%	0.8	37	72.5%
	精通 (射精)	83	63.8%	18	72.0%	65	61.9%		54	67.5%	1.0	30	58.8%
	セックス (性交) 方法	68	52.3%	18	72.0%	50	47.6% *		46	57.5%	1.4	23	45.1%
	性欲の処理の仕方	42	32.3%	14	56.0%	28	26.7% **		25	31.3%	-0.2	17	33.3%
	避妊の方法	115	88.5%	22	88.0%	93	88.6%		70	87.5%	-0.5	46	90.2%
	性感染症 (性病) の知識	109	83.8%	22	88.0%	87	82.9%		67	83.8%	-0.1	43	84.3%
	エイズ	109	83.8%	22	88.0%	87	82.9%		68	85.0%	0.4	42	82.4%
	思春期の心理	85	65.4%	18	72.0%	67	63.8%		55	68.8%	0.9	31	60.8%
	生命の誕生 (受精・妊娠・出産)	110	84.6%	21	84.0%	89	84.8%		69	86.3%	0.6	42	82.4%
	性に関する不安や悩みの相談の のつてくれるところ	52	40.0%	16	64.0%	36	34.3% **		30	37.5%	-0.6	22	43.1%
	男性と女性の心理や行動の違い その他	60	46.2%	15	60.0%	45	42.9%		40	50.0%	1.2	20	39.2%
	2	1.5%											
性教育内容の知識の程度	かなり得られた	19	14.3%	4	21.1%	15	78.9%		13	16.3%	6	11.8%	
	まあまあ得られた	80	60.2%	15	18.8%	65	81.3%		46	57.5%	34	66.7%	
	どちらともいえない	23	17.3%	3	13.6%	19	86.4%	n. s	17	21.3%	6	11.8%	
	あまり得られなかった	7	5.3%	2	28.6%	5	71.4%		4	5.0%	3	5.9%	
性教育の知識の必要性	得られなかった	2	1.5%	1	50.0%	1	50.0%		0	0.0%	2	3.9%	
	とても必要	104	78.2%	17	68.0%	87	81.3%		66	80.5%	38	74.5%	
	やや必要	27	20.3%	7	28.0%	20	18.7%		14	17.1%	13	25.5%	
	どちらともいえない	1	0.8%	1	4.0%	0	0.0%	n. s	1	1.2%	0	0.0%	
	あまり必要ない	1	0.8%	1	4.0%	0	0.0%		1	1.2%	0	0.0%	
	必要ない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%	
性に関する情報源	母親	6	4.5%										
	父親	1	0.8%										
	姉妹・兄弟	2	1.5%										
	学校の先生	63	47.4%	7	28.0%	56	52.3% **						
	先輩・後輩	17	12.8%										
	友人	57	42.9%										
	恋人	57	42.9%	1	4.0%	22	20.6% **		23	28.0%	3.8	1	2.0% ***
	テレビ	24	18.0%										
	インターネット	24	18.0%										
	雑誌	69	51.9%										
	アダルトビデオ	6	4.5%	4	16.0%	2	1.9% **						
	専門書	14	10.5%										
	病院・医師	4	3.0%										
	その他 (SNS)	1	0.8%										

* 2検定, Fisherの直接確率検 , n. s.: not significant

高橋雪子・坂本保子・藤邊祐子：大学生の性に関する調査（第一報）
 ―青森県の3大学における大学生の性教育・性行動の実態―

表5 性教育の必要性・希望する理由・希望する性教育の方法と性交経験との比較

		n = 131						
		全体		性交経験有		性交経験無		
項目	カテゴリ	n	%	n	%	n	%	有意確率
大学での性教育の 必要性	とても必要である	84	63.2%	53	66.3%	31	60.8%	n. s
	やや必要である	30	22.6%	15	18.8%	15	29.4%	
	どちらともいえない	12	9.0%	9	11.3%	3	5.9%	
	あまり必要がない	3	2.3%	2	2.5%	1	2.0%	
	必要ない	2	1.5%	1	1.3%	1	2.0%	
性教育を希望する 理由	正確な知識を身につけたい	58	43.6%	36	54.5%	22	47.8%	n. s
	男女の心理行動を知りたい	18	13.5%	11	16.7%	7	15.2%	
	高校までの性教育は不十分	23	17.3%	12	18.2%	11	23.9%	
	高校卒業後のほうが性の悩 みが増える	13	9.8%	7	10.6%	6	13.0%	
希望する性教育の 方法	講義	63	47.4%	39	61.9%	24	54.5%	n. s
	講演	34	25.6%	20	31.7%	14	31.8%	
	個別（相談室）	4	3.0%	1	1.6%	3	6.8%	
	冊子配布	6	4.5%	3	4.8%	3	6.8%	

χ²検定, Fisherの直接確率検定, n. s.: not significant

表6 性経験と避妊頻度と避妊しない理由

		n = 132						
項目	カテゴリ	全体		男		女		有意確率
		n	%	n	%	n	%	
性経験	あり	81	61.4%	16	64.0%	65	60.7%	n. s
	なし	51	38.6%	9	36.0%	42	39.3%	
避妊頻度	いつもしている	56	42.1%	12	85.7%	43	64.2%	*
	ほとんどしている	21	15.8%	0	0.0%	21	31.3%	
	時々している	4	3.0%	1	7.1%	3	4.5%	
	たまにしている	1	0.8%	1	7.1%	0	0.0%	
	妊娠しない	8	6.0%	1	4.0%	7	6.6%	
避妊をし ない理由	妊娠してもよい	4	3.0%	0	0.0%	4	3.8%	n. s
	避妊具の準備が間に合わない	10	7.5%	0	0.0%	10	9.4%	
	相手に断られる	1	0.8%	0	0.0%	1	0.9%	
	赤ちゃんを迎える準備が できている	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	雰囲気を損なう	4	3.0%	0	0.0%	4	3.8%	
	面倒くさい	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	避妊を言い出せない	3	2.3%	0	0.0%	3	2.8%	
	嫌われたくない	2	1.5%	0	0.0%	2	1.9%	
	相手の希望をかなえたい	5	3.8%	0	0.0%	5	4.7%	
	自分の欲求を満たしたい	3	2.3%	0	0.0%	3	2.8%	
	一心同体になりたい	3	2.3%	0	0.0%	3	2.8%	
	避妊具購入に費用が掛かる	2	1.5%	0	0.0%	2	1.9%	
	相手のことが好き	6	4.5%	1	4.0%	5	4.7%	

χ^2 検定, Fisherの直接確率検定, n. s.: not significant

表 7-1 これまでの性交パートナーの人数

人数	n	%	人数	n	%	人数	n	%
1 人	31	37.3	4 人	9	10.8	9 人	1	1.2
2 人	15	18.1	5 人	8	9.6	10 人	1	1.2
3 人	13	15.7	7 人	2	2.4	15 人	1	1.2

高橋雪子・坂本保子・藤邊祐子：大学生の性に関する調査（第一報）
 ―青森県の3大学における大学生の性教育・性行動の実態―

表 7-2 初めて性交経験をした年齢

年齢	n	%	年齢	n	%	年齢	n	%
12 歳	1	1.2	16 歳	7	8.4	20 歳	12.0	14.5
13 歳	3	3.6	17 歳	19	22.9	21 歳	3.6	12.0
14 歳	4	4.8	18 歳	15	18.1	無回答	1.2	3.6
15 歳	8	9.6	19 歳	12	14.5			

表 8 実施している避妊方法（複数回答）

避妊方法	n	%
男性用コンドーム	38	45.8
膣外射精	20	24.1
月経周期の活用	16	19.3
低用量ピル	12	14.5
基礎体温法の活用	1	1.2
殺精子剤	1	1.2

表9 LGBTについて

		n = 131					
項目		全体		男		女	
項目	カテゴリ	n	%	n	%	n	% 有意確率
LGBTの有無	はい	128	97.7%	24	96.0%	104	98.1%
	いいえ	3	2.3%	1	4.0%	2	1.9%
LGBTを友人仲間として	受け入れられる	88	67.2%	7	28.0%	81	76.4%
	やや受け入れられる	32	24.4%	10	40.0%	22	20.8%
	どちらともいえない	8	6.1%	5	20.0%	3	2.8% ***
	あまり受け入れられない	1	0.8%	1	4.0%	0	0.0%
	受け入れられない	2	1.5%	2	8.0%	0	0.0%

χ^2 検定, Fisherの直接確率検定, n.s.: not significant

表 10 性に関して困っていること、疑問に思っていること（自由記述）

回答者数はすべて 1

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・排卵日前後に避妊せずに性行為を行った際の妊娠の確率・女性のオーガズムについて・生理の周期がまだ不安定なこと・生理が来るまでの間、ものすごく不安になる・同じ年や年下の子の妊娠・出産をあまり受け入れられない・昔から女子らしい格好が苦手で男子のほうが良かったと思う・日々の生活や恋愛などについて考え方が違うこと・童貞と馬鹿にされるのが嫌でそのような話題になると昔の彼女の名前を出して経験があると嘘を言う・性行為に関する性教育を受ける時期が遅すぎる気がする |
|---|